

確かな学力を育てる授業の創造

学ぶ意欲を高め、表現力・思考力を育てる授業づくり -

小松市立芦城小学校

1 事例の概要

(1) 研究の内容

本校では、評価の視点から知識・技能など数値で測定できる学力を「見える学力」、学ぶ意欲や思考力・表現力など数値で測定しにくい学力を「見えない学力」と位置づけ、評価を活用した積極的な授業改善を進めている。「見える学力」だけでなく、国語科では「話す力・聞く力を中心とした表現力」、算数科では「学ぶ意欲や思考力」、特別支援教育では「人と関わり、自分で考えて行動する力」といった「見えない学力」の育成を重視した授業実践を行っている。児童一人一人が主体的に学習に取り組み、自ら考え、積極的に学び合う授業づくりを行うこと、その成果を様々な方法で検証し、指導改善に生かすことで、より確かな学力を育成することができると考える。

(2) 研究の方法

「指導体制」「指導方法」「評価」の3つの柱を通して研究テーマの具現化を図っている。

A - 1 全体構想図

A - 2 研究の内容および方法

2 実践の内容

(1) 指導体制の工夫

効果的な指導体制

指導にあたっては、少人数指導やTT指導、習熟度別・課題別指導などを組み合わせている。診断的評価、形成的評価、総括的評価を活用し、どの単元のどの過程をどの体制で学習するのかを判断し、効果的な指導が行えるように留意している。習熟度別・課題別指導においては、学習コースの選択は児童の自己選択を基本とし、アンケートや自己評価プリントを実施して選択の分割点を設けたり、オリエンテーションや相談タイムを設けたりして、適切なコース選択ができるように支援している。

一人一人が生きる場の設定

児童一人一人の学習意欲に応え、全員が参加し体験的に学べるよう、一人学習、ペア学習、グループ学習など様々な学習形態を取り入れている。特に国語科では、独話や対話、インタビューや小グループでの話し合い活動、ディベートやパネルディスカッション等多様な形態を取り入れている。また、学校行事や他学年と交流する「かがやき活動」、帯タイム「キラキラタイム」等においても児童が主体的に参加し、話したり聞いたりする力を育成できるように配慮している。

学力支援事業

教員免許状を有する地域の人材を活用し、放課後「はなまるタイム」や学級担任が児童の実態に応じて弾力的に活用できる「コンセプトタイム」においては、主に基本的な知識理解や漢字・計算練習など「見える学力」の補足的な学習を行い、基礎・基本の定着を図っている。

(2) 指導方法の工夫

ねらいを明確化した授業づくり

児童につけたい力を明確にし、ねらいに沿った授業展開や支援が行えるよう留意している。国語科においては「話すこと・聞くこと」の力を系統的に指導している。算数科においては、曖昧になりがちな「数学的な考え方」を教材研究し、少人数授業委員会等で担当者が共通理解し、授業に臨むようにしている。

個に応じた支援

児童のつまずきを予測し、個々の学習状況に応じて適切な支援が行えるよう、ワークシートや

ヒントカード・ヒントコーナー、教材・教具等を準備して授業に臨んでいる。習熟度別・課題別指導では、教師間の情報交換を密にし、児童の願いや実態に応じた手立てを工夫している。

自立した学習者を育成する授業展開の工夫

算数科においては、既習事項や既有経験を生かし、児童が自ら考える自力解決の場を大切にしたい、問題解決型の授業展開としている。また、児童一人一人に考える力がつく学習となるよう、単元や学習内容によっては、「考える足場」のある展開も取り入れている。基本の型を決めることで、児童が学習方法を獲得し、学習者として自立できるようにしたいと考えている。

意欲を喚起し、考える力を育む学習の工夫

国語科では、児童が「話したい、聞きたい！」という思いのもてる教材開発を心がけている。算数科では、算数的な活動により、児童が意欲的かつ体験的に学べるようにしている。また、演算決定の体験を積ませる工夫や算数的な表現方法の工夫等も行い、学び合い、考えを深め合う授業になるようにしている。

(3) 評価の工夫

指導と評価と支援の一体化

評価規準を明確にし、適切な評価場面・評価方法および評価規準達成のための支援を一体化した指導・評価計画を作成している。その計画をもとに、習熟度別指導や補充学習を必要に応じて取り入れている。また、授業においては、支援が必要な児童を確実に見取り適切な支援と効果の検証ができるよう、二度の評価場面を設けている。こうしたP(計画)D(実践)C(評価)A(支援)C(再評価)I(改善)を日々丁寧に行うことが大切だと考えている。この結果、ねらいに到達できていないと判断した場合は、次時の計画を見直したり、補充学習を設けたりしている。

「見えない学力」の評価

「数学的な考え方」や国語科のいくつかの観点については、学習の様子や結果を評価規準に照らして結果を補助簿に記録し、指導にフィードバックすると同時に、単元の総括的評価として蓄積している。さらに、蓄積した評価をもとに学期末や学年末の総括的評価を行っている。また、関心・意欲・態度については、児童への算数科や国語科に関するアンケート調査を実施したり、学習の感想なども活用したりして指導改善に生かしている。

自己評価力の育成

児童一人一人が自分の学習状況を振り返ることにより、自己の課題に気づき、改善し、さらに向上していくことが可能となる。こうしたメタ認知力を育てていくことは、児童の自ら学ぶ力の育成につながると同時に教師の指導のあり方を問い直す機会にもなる。

B - 1 少人数指導例

B - 2 問題解決学習モデル

B - 3 指導・評価計画

3 成果と課題

(1) 児童のアンケート調査結果から

児童に実施したアンケート結果から、全校児童の80%の児童が「算数が好き、おおむね好き」と回答、また90%の児童が「算数がわかる、おおむねわかる」と回答し、児童の関心・意欲の向上と同時に指導改善による児童の理解度の向上もみられた。

(2) 各種学力調査の結果から

県基礎学力調査の結果では、国語科、算数科ともに県全体と比較して5ポイント以上の有意差が認められた。また、算数科については、全学年でCRTを実施した結果、各観点で全国の得点率を上回っている。今後も長期的スパンで経年比較し、学力の検証をしていきたい。全ての児童に確実な学びが成立するよう、今後も粘り強く取り組みを継続していきたい。

C - 1 アンケート調査結果